

華語文芸雑誌『蕉風』の世界

総目次(1955-1999年)に見る言語と領域

山本 博之

本稿は、『蕉風』の1955年11月の創刊から1999年2月の一時休刊までの488号分の記事見出しの総目次(以下、『蕉風』総目次。本論集所収)をもとに『蕉風』の記事の概要を示し、『蕉風』を利用した馬華文学研究の入り口の1つを提示する試みである。

馬華文学に関する研究は数多くあり、『蕉風』についてもすでに複数の研究がある。本稿ではそれらをサーベイして既存の議論を紹介することはせず、『蕉風』総目次を通じて見えることをなるべく網羅的に並べるよう心がけた。はじめに44年3か月に及ぶ『蕉風』の歩みについて、多くの人が編集・刊行に関わることで『蕉風』の内容と形態がさまざまに変化してきた様子を概観する。次に、『蕉風』の特集記事を分類することで、『蕉風』が文学の世界をどのように捉え、その中に自らをどのように位置づけていたかを示す。その上で、『蕉風』の誌面を通じて馬華文学がどのように展開してきたかについて、マラヤ／マレーシアの民族関係史に置いて捉えるとともに、特にマレー語文学とボルネオ文学の2つの観点から検討する。

本稿では、『蕉風』の特集・コラム・記事(以下、「記事等」)のタイトルは原則として日本語訳を添えずに華語のまま記した。記事等の繁体字・簡体字・異体字等の表記方法は『蕉風』総目次に従った。記事等の後の丸括弧内の数字はその記事等の掲載号を示している。

1. 『蕉風』の歩み

『蕉風』の記事分類に従えば、488号分の約12,000件の記事の内訳は、詩(23%)、小説(16%)、散文(13%)、随筆(11%)、特集(9%)、批評(5%)、創作

(4%)となる¹⁾。

創刊から1999年の休刊までの間に『蕉風』は絶えずさまざまな企画を取り入れて変容してきた。その様子は『蕉風』の記事等に見ることができる。例えば梅淑貞によるコラム「人間集」の「蕉風」(374)、「我們的刊物」(375)、「周報和學報」(376)には、1955年から1983年までの『蕉風』の編集体制および刊行の様子がまとめられている。「蕉風記憶」(482-487)でも『蕉風』の歴史が回顧されている。

ただしここでは『蕉風』の編集・刊行に携わってきた人々の思いに分け入ることはせず、形式面を中心に『蕉風』の44年3か月間の歩みを列挙することで概観を捉えることにする。

『蕉風』は創刊当初から非華語の文学作品を積極的に翻訳して紹介した。初期の翻訳では著者名が記されずに訳者名のみ記されるのが一般的で、作品名に原題が添えられないことや、著者名が音訳された漢字名だけであることも多かった。他の刊行物の記事を翻訳して掲載した場合でも、転載元の情報が示されることはほとんどなかった。

購読者の拡大と書き手の発掘のための工夫として論文コンテストが企画された。「我的生活」と「我最難忘的」をテーマにした論文を公募し、優秀作品が誌上で発表された(175-187)。

第202号から判型が変わったことに伴って誌面が一新された。この頃から非華語圏の人名にローマ字表記が添えられることが増え、他の雑誌等からの転載記事には原典が示されるようになった。末尾に脱稿日を書き添える記事等がしだいに増えていき、執

1) 2%以下のものでも主なものには、研究、書評、翻訳、美術、映画がある。なお、ここでの分類は各号の目次に記された記事分類をもとに機械的に算出したもので、特集に分類されたものの中に小説や詩があるなど、厳密な数値ではないことに注意されたい。

筆地を書き添えるものも現れた²⁾。

創刊当初は映画に関する記事はほとんどなく、『戦争と平和』(キング・ヴィダー監督、1956年)(37)や『不夜城』(湯曉丹監督、1957年)(156)の記事がある程度だった。第235号で映画の特集が生まれ、それ以後は毎号のように映画に関する記事が掲載された。映画『ラストエンペラー』(415)の座談会も行われた。

毎号の表紙や裏表紙のカラーページをはじめ多数の美術作品が掲載された。それらの多くは他の記事等と同様に白黒で印刷されたが、色刷りの図画ページが挿入されたこともある(303, 459)。「陳瑞獻紙刻展」(317)の特集を画期に美術の記事が増え、第342号からは巻末付録として美術版が設けられた³⁾。シンガポール画家特集(368)や版画(344)のように美術についての座談会も組まれた。

『蕉風』には批評や研究も掲載された。第281号からは比較文学の論文の翻訳が断続的に掲載された(281-295)。

創刊30周年記念特大号(384)では創刊号の巻頭言が再掲された。

このように、『蕉風』では多くの人が編集に関わりながら内容や形態をさまざまに変えてきた。その変化の背景は編集後記や投書欄に相当する記事を通じて知ることができる。創刊号から第391号までは編集後記が巻末に置かれ⁴⁾、第392号から第488号までは巻頭に置かれた⁵⁾。編集室によるコラムとして、「風聲」(301-387)は主に出版・イベント情報を掲載した。「風箋」(301-387)は主に作家の近況短報や読者の投稿を掲載し、それらのうち投稿は「読者、作者、編者」(392-420)を経て「風箋」(424-443)に引き継がれた。

2) 当初は執筆地が書き添えられた記事は1号あたり1件程度だった。第202号から5年間で書き添えられた執筆地は以下の通り(大括弧内の数字は登場回数、ただし1回の場合は省略)。マラヤ……ブキムルタジャム(ペナン州)[5]、スプラン・プライ(ペナン州)[4]、プタリン[2]、クダ州、マラッカ州、イポー(ペラ州)、クアラルンプール。シンガポール[6]。サラワク……シブ[2]、ラジャン。東南アジア……インドネシア、ビルマ。東アジア……台北[4]、台湾大学、香港、九龍(香港)、萊陽(山東省)、北海道、横浜磯子区。オーストラリア……シドニー[4]、オーストラリア、モナシュ大学。欧米諸国……カナダ、ベルリン、アメリカ。

3) 確認できた限りでは美術版は第250号まで9号掲載された。

4) 記事名は「読者、作者、編者」(1-81, 150-185)、「編者的話」(85-149, 186-201)、「風訊」(202-391)と変わった。

5) 「編輯筆記」(392-400, 404-421)、「編者筆記」(401-403)、「編輯桌上」(422-443)、「編輯人語」(444-481)、「編輯室報告」(482-488)。

複数の執筆者が入れ替わりで執筆する連載記事には、「寓言」(11-29, 61, 93, 224-308, 464)、「文藝沙龍」(135-201)、「作家信箱」(152-166, 213)、「風向」(288-318, 346-388)、「浮生記」(393-418)、「天涯書」(393-425)、「蕉風信箱」(482-488)など多数ある⁶⁾。

1人の執筆者が継続して執筆する連載記事(專欄)には、「姚拓録」(掲載回数127回)や「人間集」(同67回)をはじめとするさまざまなものがある。執筆者ごとに連載開始時期の順に並べると、劉藹如の「文壇雜話」(41-76)、温梓川の「文壇憶旧」(164-201)、黄潤岳の「閒思録」(203-385)と同「乱弾集」(409-442)、劉放の「流放集」(217-245)、邁克の「輕描集」(250-340)、鄭百年の「學與思」(264-299)、同「文史叢談」(306-326)、同「百年專欄」(339-370)、同「香江隨筆」(437-452)、梅淑貞の「人間集」(301-381)、爾然の「清涼集」(424-463)⁷⁾などがある。

2. 世界の中の『蕉風』 ——特集に見る『蕉風』の関心

T.S.エリオット記念特集(149)以降、『蕉風』ではテーマごとの特集⁸⁾が組まれるようになり、特集は『蕉風』の記事見出しの約1割を占めるまでになった。特集は常設ではなく、特集がない号もあれば、1つの号に複数の特集が組まれることもあり、その時々に関心が誌面に反映されたものと見ることができる。特集をいくつかに分類して提示することで『蕉風』の関心の所在を概観する。

文学

特定の言語圏に限定されない文学に関する特集として、西洋文学(234)、詩(267, 484)、SF(313)⁹⁾、散文(320)、小小説(348)、書と読書(395)、児童詩(396, 397)、鬼[幽霊](414)、女性作家(445)、童話(449)、文学批評の必要性(486)などがある。特集ではない

6) 連載記事の個々の記事には『蕉風』や馬華文学についての見解を含むさまざまなことがら記されているが、本稿では取り上げていない。

7) ここに挙げたもののほか、掲載回数が20回以下のものに「輕評集」(何榮良、280-295)、「頼山舫」(頼山舫、299-306)、「冷水集」(沙禽、318-324)、「雨花隨筆」(郝毅民、341-388)、「蛙鳴集」(姚拓、434-442)、「情緣集」(姚拓、449, 453)、「他山之石」(楊現、454-456)などがある。

8) 「小輯」「特輯」「專題」「專頁」などさまざまな呼ばれるが、本稿では区別せず「特集」とする。

9) これ以後、第318号までSF出版年表が掲載された。

が、これらと関連する座談会として、創作の良心と自覚(212)、文学の口語化(215)、散文(246)¹⁰⁾、現代詩(353)、大学生と文学創作(397)、女性の自覚(415)がある。

文学以外の特集として、舞台芸術に関して戯劇(328, 329)、映像芸術に関して映画(235)がある¹¹⁾。

非華語圏の文学

非華語圏(主に西洋)の文学への特集として以下のものがある。名前の後の国名は出身地または主な活動地を示す。なお、『蕉風』はノーベル文学賞に強い関心を持っていたことから、ノーベル文学賞受賞者の名前には*をつけた。

T.S.エリオット*[英](149)、W.B.イエイツ[アイルランド](155)、アラン・ロブ=グリエ[仏](211)、フランツ・カフカ[チェコ](218)、アーネスト・ヘミングウェイ*[米](222, 223)、ソール・ベロウ*[米](286)、アンドレ・マルロー[仏](287)、ロバート・アルトマン[米](308)、アイザック・バシエヴィス・シンガー*[ポーランド/米](309)、アイザック・アシモフ[米](313)、カート・ヴォネガット[米](313)、D. H. ロレンス[英](321)、オデュッセアス・エリテイス*[ギリシャ](322)、ジャン=ポール・サルトル*[仏](328)、アーサー・ミラー[米](336)、エリアス・カネッティ*[英](344)、バーナード・マラムッド[米](350)、アントニー・バージェス[英](367)、ウィリアム・ゴールディング*[英](372)、フランソワ・トリュフォー[仏](379)、クロード・シモン*[仏](390)¹²⁾。

ラテンアメリカ文学に関する特集にはガブリエル・ガルシア=マルケス*[コロンビア](356)とラテンアメリカ文学特集(391)がある。ソ連の文学に関する特集にはヴァーツラフ・ニジンスキー(214)、アレクセ

イ・ソルジェニーツィン*(215, 253)、ソ連移民詩人特集(410)がある。エジプトの文学に関してナギーブ・マフフーズ*(421)の特集がある。

非華語圏の文学作品についての特集には『ユリシーズ』(211)と『ゴドーを待ちながら』(285)がある。

東アジアへの関心

日本の文学、映像芸術、美術にも関心が向けられている。特集以外の記事も含めて紹介する。

文学では、三島由紀夫の特集(216)が組まれたほか、三島由紀夫(57, 217, 241)、中島敦(123)、芥川龍之介(131)、森鷗外(168-173, 206)、小泉八雲(173)、高井有一(181)、国木田独步(213)、川端康成(231)の記事が掲載された。「日本新詩選」(133)では八木重吉、坪井繁治、岩佐東一郎、武者小路実篤が紹介されている。

映像芸術では、黒澤明の特集(341)が組まれたほか、大島渚(235)、黒澤明(236, 352)、成瀬巳喜男(404)の記事が掲載された。

美術では前田真三(写真, 311, 314)や斎藤清(版画, 405, 408, 409, 419)が紹介された。

これらのほか、第318号では日本文学の中国現代作家への影響についての論文が掲載され、第392号では今富正巳(東洋大学)の馬華文学研究が紹介されている。

日本への関心が高いのと対照的に韓国/朝鮮に対する関心は低く、記事見出しを見る限りでは金北鳴¹³⁾の小説(28)とイ・ボムソンの『かもめ』(336)が紹介されているのみである。

華語圏の文学

華語圏の作家に関する特集を初出が早い順に挙げると、牧鈴奴(211)、宋子衡(240, 320)、陳瑞猷(240, 317, 332, 442, 459)、余光中(276)、何其芳(295)、小黒(305)、黄継豪(342)、楊煉(398)、梁實秋・沈從文(414)、方北方(452)、陳強華(454)、韋暈(455)、林幸謙(456, 469)、姚拓(457)、王徳志(465)、張瑋栩(468)、方路(470)、沙河(473)、呉岸(475)、陳大為(480)、劉育龍(481)、翠園(481)、梁放(483)、雨川(487)となる。

また、「大山脚」(ベナン州ブキ・ムルタジャム地方)

13) 詳細は不明。記事では「朝鮮の作家」と紹介されている。

10) この座談会では参加者の職業と年齢が記されており、『蕉風』の常連執筆者たちが10代の若さであることに驚かされる。

11) これら以外の特集に、客連小説奨受賞作品(446, 447)、マレーシア旅台文学奨(440)、新声代(454)などがある。また、『蕉風』に関する特集に30周年記念(384)と『蕉風』38年(458)がある。

12) 特集以外のノーベル文学賞受賞者の記事には以下のものがある。ウィリアム・フォークナー[米](179)、川端康成[日](231)、サミュエル・ベケット[アイルランド](205)、パブロ・ネルーダ[チリ](391)、パトリック・ホワイト[オーストラリア](249)、エウジェニオ・モンターレ[伊](273)、ソール・ベロウ[米](285, 297)、ピセンテ・アレクサンダー[スペイン](297, 299)、チェスワフ・ミウォシュ[ポーランド](334)、クロード・シモン[仏](390)、ヨシフ・プロツキー[米](334)、オクタビオ・パス[メキシコ](324)、デレック・ウォルコット[セントルシア](453)。

の作家特集(375, 429)および5回シリーズの馬華作家特集(雨川(420)、洪泉(423)、方昂(426)、李宗舜(431)、艾文(433))もある。

華語圏の詩についての特集に香港現代詩(293)と台湾新生代詩(478)がある。関連して、中国語文学の目録に中国新詩集総目録(283-287)と台湾現代詩集目録(288-295)がある。

文学以外の特集に、張泛の詩楽(314)、黄益恵の紙刻(319)、南洋美専マレーシア校友美展(343)、マレーシア影芸協会(346)、顧媚と丁衍鏞(香港画家)(348)、胡德馨の版画(349)などがある。

華語圏の文学作品についての特集に『猫恋』¹⁴⁾(428)と『孤舟神話』(488)がある。

東南アジアの文学

マラヤの近隣地域の文学に関する特集を地理的・言語的に分けると以下ようになる。ここでは特集を地理的・言語的に並べて示すことを目的としており、それぞれについての検討は次節で行う。

シンガポールに関するものとして、シンガポール詩人作品(416)とシンガポール作家(458)の特集がある。

サラワクに関するものとしてサラワク(411, 460)とサラワク五作者(477)、サバに関するものとしてサングカン文芸協会(432)の特集がある。

インドネシアに関するものは、インドネシア出身の華人で主に華語で創作を行うロミオ・チェン(柔密欧・鄭)の特集(445, 464)がある。

マレー語圏(マレーシア、シンガポール、インドネシア)以外の華語文学に関して、フィリピンの華語文学(菲華文学)(413)や、米国で中国からの移民一世の娘として生まれ、米国で文筆活動を行っているマキシーン・ホン・キングストン(湯婷婷)(337)の特集がある。

マレー語文学については、第220号でマレー作家の特集が生まれ、同じ号にはトンカット・ワラント、ヤハヤ・イスマイル、アブドゥル・ラティフ・モヒディンらの小特集も組まれた。それ以外のマレー語作家の特集にザカリア・アリ(326)およびマレー文学界の華裔作家(485)がある。インドネシア現代文学(311)の特集も組まれている。

14)『猫恋』は第428号に掲載されている。

3. 『蕉風』の自画像 ——「馬」と「華」から見る馬華文学

『蕉風』では、マラヤ独立を1年後に控えた1956年8月から8回にわたって文芸座談会が行われた。テーマは、馬華文壇(20, 22)、愛情と色情(24)、華語学校の戯劇(27)、1957年の馬華文壇の展望(29)、小説創作(31)、詩の創作(33)、報告文学(35)であり、創刊当初から「馬華文芸」をめぐる議論が行われていた。

ただし、当初は記事見出しでは「馬華文芸」または「馬華文壇」が使われ、「馬華文学」は見られない。「馬華文学」は第181号にいったん登場するが¹⁵⁾、再び登場して定着するのは第251号以降で、これと入れ替わりになる形で「馬華文芸」と「馬華文壇」が使われなくなる。以下では「馬華文学」に「馬華文芸」や「馬華文壇」を含めている。

「馬華文学」が何を意味するのかは、「馬」と「華」をそれぞれどのように解釈するかによる。「馬」には民族・言語名の「馬來」(マレー)および地名・国名の「馬來亞」(マラヤ)および「馬來西亞」(マレーシア)などの複数の意味があることを念頭に置き、『蕉風』の記事見出しをもとに、「馬」に注目して馬華文学が指すものを考えてみたい。

(1)マレーシアと馬華文学

マラヤは1957年8月にマラヤ連邦としてイギリスから独立した。独立にあたり、独立すなわち統治の「マラヤ化」とは、マラヤの原住民で多数派であるマレー人の手に統治が渡されることなのか、それとも民族の別なくマラヤの人々の手に統治が渡されることなのかに関心が向けられ、『蕉風』に「馬來亞化是什麼?」(16)や「馬來亞化與馬來化」(18)などの記事が掲載された¹⁶⁾。

これは、自分たちが植民地の臣民ではなく独立国家の国民になることへの自覚を持ち、国内の他民族と一緒に国家運営の応分の責任を負うとともに、そ

15)「馬華文學的重要性」(181)は投書記事「不要劃分界線! 一位香港詩人的來信」(177)に応答したもの。もとの投書記事に「馬華文学」の表現はない。

16)1957年のマラヤ独立から1963年のマレーシア結成までに書かれた「馬華文芸」に関する記事に、「馬華文藝的時代性與獨立性寫在馬來亞獨立的前夕」(44)、「展望馬華文藝的遠景 為「蕉風」三週年而作」(72)、「改版的話 兼論馬華文藝的發展路向」(78)などがある。

れにふさわしい地位を認めてもらいたいという前向きな態度の表われと理解できる。ただし、マラヤという領域を持った国家が意識されることで、それ以外の地域との区別が意識されるという別の意味が生まれることになる。

以下では、マラヤ（後にマレーシア）という国家内部での「馬」（マレー）との関係における「華」の位置づけの変遷と、それに伴うマラヤ以外の地域（香港・台湾、シンガポール、ボルネオ）との関係における「馬」と「華」の位置づけについて見ていきたい。

●マレーシア結成（1963年）

1963年9月のマレーシア結成を経て、『蕉風』は1966年9月から「馬來西亞的讀者和作品」(167)、「詩人看馬華詩壇」(168)、「馬來西亞文學座談會記錄」(169)、「青年作者與馬華文壇」(172)の座談会を連続して行うとともに、4回にわたって「過去の烙印 戦後馬華新詩的發展」(168-171)を掲載した¹⁷⁾。

そこでの議論を踏まえて、『蕉風』は第174号から編集方針を「マラヤ化」から「マレーシア化」に変更した。このことは、マレーシア以外の地域（香港・台湾やシンガポール）の文学は馬華文学に含まれないのかという疑問を招いた¹⁸⁾。『蕉風』の「マレーシア化」により香港や台湾の作家が門外に置かれてしまうことへの異議表明（「不要劃分界線！一位香港詩人的來信」(177)）がなされた。これを受けて「馬華文學的重要性」(181)や「馬華文壇與寫實主義」(189)の記事が掲載されたほか、「文藝沙龍」欄でもそれぞれの作家の見解が表明された¹⁹⁾。

●シンガポール分離独立（1965年）

マラヤとシンガポールは歴史的にも文化的にも互いに密接な関係にあった。しかし、第二次世界大戦後にこの地に復帰したイギリスが1946年にマラヤとシンガポールを切り離して統治し、さらに1957年8月にマラヤが独立したことで、マラヤとシンガポ-

ールの間の行政上の壁は一層高くなった。シンガポールは1963年9月のマレーシア結成に参加したが、2年後にマレーシアから離脱し、マレーシアとシンガポールは独立した国家どうしの関係になった。

「馬」をマラヤまたはマレーシアという地域として見るならば、シンガポールは「馬」の外部の存在である。ただしシンガポールではマレー語が公用語の1つであり、「馬」を言語・文化的に見るならば、シンガポールには今日に至るまで「馬」が存在しているとも言える。

1965年以降の『蕉風』では、シンガポール（「星」または「新」）とマレーシア（「馬」）は行政上は異なるが社会・文化的には一体であるという考え方を反映して、「新馬」「星馬」「馬新」と書かれた記事や座談会記録²⁰⁾が掲載され、第205号には増刊冊子で「星馬詩人作品」が特集された。また、これと同時にシンガポールを単独で取り上げる特集も生まれ、特別号「潮變時候 新加坡年輕作者」(319)のほか、美術版の「新加坡現代畫會作品選」(368)²¹⁾や小特集「新加坡作家」(458)などが掲載された。

●民族暴動「5月13日事件」(1969年)

マレーシアでは1969年5月10日の総選挙で与野党の獲得議席数が拮抗し、同年5月13日に与党支持者と野党支持者の双方による勝利デモが衝突して暴動に発展した。暴動はほぼ1日で終息したが、与党支持者側にマレー人が多く、野党支持者側に華人が多かったことから、民族衝突の形をとって波及し、公式発表によれば数日間で死者196人の犠牲を出す大惨事になった。この事件は5月13日事件と呼ばれる。

非常事態宣言によって停止されていた国会が1971年2月に再開され、ブミプトラ（マレー人と先住諸族）の経済的地位向上を図る新経済政策（ブミプトラ政策）が始まるとともに、マレーシアの国民文化は土着文化であるマレー文化を基盤とし、それに抵触しない限りにおいて他の文化も含められると国民文化

17) この前後の馬華文学に関する記事に「我們對馬華文壇的看法」(133)、「一九六四年的馬華文壇」(151)、「青年作者與馬華文壇」(172)、「評「戦後馬華詩歌發展一瞥」」(172, 173)などがある。

18) 注15も参照。

19) 「文藝沙龍」欄の記事には「馬華文藝的復興」(190)、「馬華文壇是毒草叢生嗎？」(190)、「今年是馬華文藝復興年！」(195)、「某先生抵得上半個馬華文壇」(195)、「馬華文藝界的了解和連繫」(196)などがある。

20) 「星馬」の例に「星馬現代畫家介紹」(168-170)、「星馬畫家介紹」(173)、「星馬現代詩集內容提要」(221)、「星馬華文文學縱橫談 黃孟文博士訪問記」(359)、「新馬」の例に「解放的新世界 新馬現代文學的發展」(232)、「以新馬華人為例子談 社會組織和文化」(272)、座談会「現代詩在新馬的地位與風貌」(307)、「馬新」の例に「寫實兼寫意 馬新留台作家初論」(419, 420)などがある。

21) 全ての画家の名前と略歴が華語と英語の二言語表記になっている。

の定義が発表された。

『蕉風』は1973年11月に「馬來西亞華裔的文化」(249) およびそれに対する批評「談「馬來西亞華裔的文化」一文中的文學藝術論點」(249) を掲載した。次の号では「討論(馬來裔的文化)」(250) の欄を設けて「對馬來西亞華裔文化的一些見解」「華裔文化通訊談」「論創造大馬文化之道」の3つの論考を掲載し、それと別に「馬華作者的歸向」(250) も掲載した。さらに次の号では、「討論(馬來西亞華裔的文化)」(251) の欄に「漫談華裔文化」「怎樣才算是馬華文藝?」「從「馬華文學」到「國家意識」「文化是甚麼」などの記事を掲載した。この議論は「澄清馬華「文學觀念」要緊」(252) や「再談馬華作者的歸向」(255) などの記事で継続された。

1974年に温任平らによって書籍『馬華文學』が刊行され、「温任平等著「馬華文學」」(270)、「我底辯白關於「馬華文學」這本書」(272) などの批評が掲載された。

また、馬華文学に関する座談会(筆談会)が行われ、「現代詩座談會 馬華現代詩、詩評、詩方向」(292)、「馬華小説的探討」(327) などの記録が掲載された²²⁾。

●大量逮捕事件「オペラシ・ララン」(1987年)

1987年10月、警察による大規模な取り締まりが行われ、令状なしの逮捕と裁判なしの勾留を認める国内治安法 (ISA) によって100人以上が逮捕・勾留され、華語日刊紙『星洲日報』を含む3紙が停刊処分になった。直接の背景は、華語教育を受けていない華人教員が華語学校の管理職に任命されたことに華人社会が反発し、民族間の緊張が高まったために民族暴動の発生を防ぐためとされた。マレー語で「ララン」と呼ばれる茅の草刈りにたとえて「茅草行動」(マレー語ではオペラシ・ララン) と呼ばれた。

この頃、『蕉風』では5回シリーズの馬華作家特集(雨川(420)、洪泉(423)、方昂(426)、李宗舜(431)、

22) この時期の馬華文学に関する記事に、「馬華現代詩與馬華社會」(292)、「馬華寫作者所要認清的處境和歸向」(303)、「華人社會和馬華文學」(311)、「馬華現代文學的意義與未來發展」(317)、「略論馬華現代短篇小說的題材與表現」(338)、「五四格律詩的傳統與馬華詩人」(341)、「買「馬華文學」罐頭」(353)、「星馬華文學縱橫談」(359)、「華裔馬來西亞文學」(374)、「談馬華現代詩在取材方面的問題」(376)、「馬華當代文學選(散文)導論」(383)、「與今富正已教授談馬華文學」(392)、「馬來西亞獨立後馬華文學的發展」(394)、「內行的心情・外行的看法 馬華文學的發展方向」(398) などがある。

艾文(433) が掲載され、座談会「當今馬華文學的趨向《蕉風》作者座談會」(427) が掲載された²³⁾。

1990年2月の第435号から表記が繁体字から簡体字に切り替えられた²⁴⁾。1994年2月には「『蕉風』38年」(458) の特集が生まれ、「《蕉風》与马华文学 一个读者心目中的《蕉風》」や「马华文学摇篮 《蕉風》欢庆38岁 姚拓数前尘」などの記事が掲載された²⁵⁾。

(2)マレー語文学と馬華文学

マラヤでは多数派であるマレー人に対して華人やインド人や先住諸族が少数派であり、華人にとって国内の民族間関係と言えども「馬」対「華」であると言える²⁶⁾。馬華文学の鏡像にあたるマレー語文学を『蕉風』がどのように捉えていたかを整理しよう。

なお、以下ではマラヤ/マレーシアのマレー語文学だけでなくインドネシアのインドネシア語文学も含めている。マラヤ/マレーシアの国語であるマレー語と、隣国インドネシアの国語であるインドネシア語は、同根の言語で相互に理解可能であり、とりわけ書き言葉では共通である度合いが大きい。そのため、マラヤ/マレーシアやシンガポールの華人にはマレー語文学にインドネシア文学を含める考え方がある。

『蕉風』は創刊当初からマラヤに関心を向けている。「馬來亞的天氣」(4) や「馬來亞的服裝」(15) などの記

23) この時期の馬華文学に関する記事に、「誤讀指南 馬华文学怎样变?」(444)、「九十年代马华文学展望」(448)、「马华文学 马大中文系扮演什么角色?」(454)、「马华文学与文化属性 以独立前若干文学活动为例」(455)、「留台学生与马华文学」(456) などがある。

24) 簡体字から繁体字への実際の切り替えは第435号以降に段階的に進められた。詳しくは『蕉風』総目録を参照。

25) この時期の馬華文学に関する記事に、「略談中国大陆文坛对马华文学的研究」(460)、「漫谈马华文学走向世界」(464)、「论马来西亚华文文学的本土特色」(465)、「写在读者心版上的人格芬芳 论马华诗人田思及其诗作」(469)、「椰风蕉雨话诗坛 从十年蕉风看当代马华诗坛」(470)、「马华新诗的新形象《马华当代诗选》扫描」(473)、「回归文学 无声的马华文学运动」(482)、「中国影响论与马华文学」(484)、「现代性与文化属性 论60、70年代马华现代诗的时代性质」(488) などがある。

26) 『蕉風』ではマラヤのインド人にもほとんど関心が向けられていない。見出しに「印度」が登場する記事のほとんどは外国であるインドの話である。マラヤ/シンガポールのインド人を扱った記事は、「印度人的婚禮」(10)、「我所知道的印度人」(17)、「老印度花販和花」(214)、「印度」(219)、「那些印度人」(342)、「印度風味」(403) のように数えるほどしかない。また、先住諸族に関する記事に「沙蓋」(サカイ) (58, 60, 68) がある。なお、「サカイ」とはかつてマラヤの先住諸族の総称として使われていたが、「奴隸」などの侮蔑の意味を含むため、1960年代に「サカイ」にかえて「オラン・アスリ」が使われるようになった。

事が掲載され、「馬來亞青年園地」(13)などの欄を設けている。「遊記」(6-21)では作家たちがマラヤ各地の訪問記を掲載している²⁷⁾。これらの記事等には自分たちがマラヤの一員であるという意識がうかがえる。

これと同時に、『蕉風』は多民族社会マラヤを構成する隣人であるマレー人の社会と文化にも関心を向けている。「捕虎記」(1)、「馬來詩兩首」(2)、「馬來人的魔術」(3)といったマレー人に関する本の翻訳や、「馬來人的婚俗」(6)や「馬來人為什麼忌食豬肉呢？」(15)などの記事を掲載している。

『蕉風』はマレー文学にも関心を向け、「亞都拉和海盜」(1, 2)、「百年前的星洲天地會」(3-5)、ハン・トゥア物語²⁸⁾、「馬六甲公主」(6-22)を連載している。もっとも、これらはいずれもマレー古典文学の翻訳であり、マレー語近代文学には関心が向けられていない。マレー語近代文学への関心はマラヤではなくインドネシアの文学に向けられ、1957年のマラヤ独立までに、ウトゥイ・タタン・ソントニ (21, 32, 33)、アブドゥル・マリク・カリム・アマルッラー (ハムカ) (26, 42)、ルスマン・スティアスマルガ (29) の記事が掲載された²⁹⁾。

初期の『蕉風』ではマラヤのマレー語現代文学はほとんど紹介されてこなかったが³⁰⁾、マラヤ独立から10年を迎えようとする1967年4月に開始された「馬來文學譯介」(174-197)で、国民的文学者³¹⁾であるトンカット・ワラン** (175, 177, 220)、クリス・マス** (188-190, 197, 321)、シャノン・アフマド** (191-192, 220)、カリド・アッバス (193-194) の作品が翻訳された³²⁾。1968年にはモハマド・ハッサン (187) の小説の翻訳も掲載された。

27)「遊記」のコラムは第278号まで続くが、第22号以降の一時中断を経て、第44号以降は主に外国の旅行記になった。

28)「勇士漢都亞的童年」(3, 4)、「勇士漢都亞的成名」(5, 6)、「漢都亞揚名爪哇」(8, 10)、「漢都亞成仙」(23)に分けて掲載された。

29)1957年以降に掲載されたインドネシアの作家に関する記事に、ウトゥイ・タタン・ソントニ (88)、アリ・スカルディ (100)、ハイリル・アンワル (205) がある。

30)紹介されたものにアブドゥル・ラーマン・モハマド・アリ (96) がある。ほかにA.Z. Hamzah (59)、巫安 (85)、默漢默・沙立夫 (89) もあるが、詳細は不明。

31)マレーシアでは1981年に国民文学賞が創設され、2019年までに14人が受賞している。国民文学賞受賞者には初出時に名前の後に**を付けた。

32)「馬來文學譯介」以外に記事が掲載された号も示している。なお、「馬來文學譯介」の第1回はマレー古典文学の「獠牙王」(ブルシオン王) (174) が掲載された。

1971年5月は、マレー／インドネシア文学に関する複数の特集が掲載され、全体でマレー語文学の特別号になった。「馬來文學的現況與發展」特集 (220) ではサラワクのマレー語文学やインドネシア文学を含む「馬來文學」が紹介された。「馬來短篇小說選譯」欄 (220) では、モハマド・イサ・イスマイル、シャノン・アフマド、ハッサン・アフマド、S・マラ、ヤハヤ・イスマイルの作品が紹介された。「馬來(印尼)文學名著評論」特集 (220) ではアフディアット・カルタ・ミハルジャの作品評が掲載された。また、トンカット・ワラン、ヤハヤ・イスマイル、アブドゥル・ラティフ・モヒディンの作家ごとの特集が組まれた。

これ以降、マレー語作品の翻訳が積極的に掲載されるようになり、マスリ (221)、ザイド・アフマド (221)、アブドゥル・ラティフ・モヒディン (224)³³⁾ の作品が掲載されたほか、「馬來婦女在文學方面的活動」(223) のような評論・研究も掲載された。

1973年1月にはマレー語文学の翻訳欄が設けられ、シワル (239)、アンワル・リドワン** (243)、ガザリ・M・A (245)、ヤスミン・アブドゥッラー (249)、アニス (251)、シデック・ババ (251)、アフマド・マフムド (256)、ラーマン・シャアリ (268)、ムハンマド・サレー** (290, 299, 444)、アジジ・アブドゥッラー (291, 312)、ファティマ・ブス (293)、バハ・ザイン** (294)、N・アズラック (306) の小説、ラティフ (260, 265, 288, 297) の詩、ディンスマン (291, 302, 328) の戯劇が紹介された。

1978年2月からは、14回のマレー語文学講座と2回のインドネシア文学講座を含む全16回の「馬來文學講座」が始まり、ムンシ・アブドゥッラー (300)、「國家編纂局」(301, 304)、「回教作者」(306)、「草創時期的新詩」(307)、「教師出身的寫作者」(309)、「新作家行列」(310)、「編纂局與新作家行列之外的作品」(315)、「記者出身的寫作者」(316)、「四五十年代作家陣線」(318, 321)、「五十年代作家行列」(323)、「馬來近代文學作品」(324, 326) および「印尼近代文學作品」(334, 335) が掲載された。

1979年1月にインドネシア現代文学の特集「印尼現代文學譯介」(311) が組まれた。アブドゥル・ハディ (310, 311, 312) とレンドラ (311) の詩が紹介され、イ

33)アブドゥル・ラティフ・モヒディンは第203号以降、頻繁に掲載された。以下、「ラティフ」と表記する。

ワン・シマトゥパンによる『朝聖者』(巡礼)(311-316)の翻訳の連載が始まった³⁴⁾。

これ以降、ザカリア・アリの特集(326)のほか、個別の記事として、ザカリア・アリ(323)、アブドゥル・アジズ・ダウイ(358)、カディジャ・ハシム(448)の小説、サマド・サイド** (324)、ラティフ(325)、ズリナ・ハッサン** (325)、ジハティ・アバディ(ヤハヤ・フシン)(448)の詩、ジョハン・ジャアファル(328-330)の戯劇、シャリファ・ファティマ・サイド・ズビル(399)の膠彩画、ソハイミ・アブドゥル・アジズ(483)の批評・研究が掲載された。

1998年8月にはマレー語で執筆する華人³⁵⁾作家の特集「马来文学界的华裔作家」(485)が生まれ、ジョン・チアンライ(Jong Chian Lai)³⁶⁾、リム・スウィーティン(Lim Swee Tin)³⁷⁾、アワン・アブドゥッラー(Awang Abdullah)³⁸⁾が紹介された。ここにおいて「馬華」は「馬」(マレー語)で執筆する「華」(華人)を意味し、「華」には言語ではなく血統の意味が与えられており、「馬華文学」が新たな状況を迎えていると言える。

ジョン・チアンライはサラワクで生まれ育ち、サラワクの社会や歴史を反映した作品の執筆で知られる。2006年には東南アジア文学賞を受賞している。長編小説『蜂起』(1994)³⁹⁾は、マレー人、華人、イバン人が連携して白人ラジャのブルックに反乱を起こす内容で、マレー人作家から批判を受けた。サラワクの華人作家は華語で創作する限りはサラワクの独自性を織り込むと馬華文学の枠組みに入りにくい、マレー語で創作することでマレーシア国民文化の枠組みに入り、批評の対象になることを示している。

(3)ボルネオと馬華文学⁴⁰⁾

ボルネオ島のサラワクとサバは1963年8月にイ

34) これ以降に掲載されるインドネシア文学に関する記事はモフタル・ルビス(392)とハイリル・アンワル(484)に関するものである。

35) 原文では「華裔」だが、ここでは「華人」と「華裔」についての議論に立ち入らず「華人」と書く。

36) 漢字名は田江来。サラワク出身。

37) 漢字名は記事によって林瑞禎、林瑞汀、林天英と書かれる。

38) 華語名はPui Tiong Gee(漢字名は不明。裴忠義か)。クランタン出身。

39) 原題はマレー語で『Pemberontakan』。「叛亂」「叛變」と訳すか「起義」と訳すかによって蜂起に正義があるか否かという評価が含まれることから、華語の文では書名を訳さずPemberontakanのまま使われることも多い。本稿では「蜂起」と訳した。

40) 「西マレーシア」「東マレーシア」という言い方は、後にマレーシア国内の分断を意識させるとして公的文書では使われなく、

ギリスから独立し、同年9月にマラヤ連邦とシンガポールとともに連邦国家マレーシアを結成した。サラワクとサバから見れば、マラヤはもともと海の向こうにある別の国で、1963年に一緒にマレーシアを結成したパートナーどうしの関係である。しかしマレーシアでは基本的にマラヤの仕組みが使われたため、サラワクやサバの人たちから見ると、マレーシア結成によってマラヤの仕組みや考え方が押し付けられたと感じられることになった。

「馬」がマレーシアを指すのであれば、サラワクやサバの仕組みや考え方も採り入れて新たに「馬」が作られるべきだが、現実には「馬」はマラヤで、それがサラワクとサバに押し付けられたと映った。しかしその主張はマラヤには理解されず、サラワクとサバは過去の経緯を持ち出して不満ばかり言うという印象だけ与え、この掛け違いの解消は現在に至るまで課題であり続けている。

1969年5月に『蕉風』に「加强東西馬文藝界聯繫」(199)が掲載された。黄崖がサバ州のサンダカンを訪れたところ、会員数400人以上のサンダカン青年文芸協会が活発に活動していることを知り、西マレーシア(マラヤ)と東マレーシア(ボルネオ)が協力してマレーシアの文芸界の連携を強めようと呼びかけた。もっとも、サバについてはその20年後にサンダカン文芸協会の特集(432)が組まれた程度で、連携が目に見える形で進んだとは言いがたい。それと対照的であるのがサラワクである。

先の記事から16年後の1985年7月、「東馬一読者」(東マレーシアの一読者)による「一點感想」(385)と題する投書が掲載された。少なくとも1982年以来、『蕉風』には東マレーシアの作家も画家も掲載されておらず、『蕉風』は東マレーシアには掲載に値する作家も画家もいないと見ているのかという批判だった⁴¹⁾。

実際には、謝永成(217)や謝永就(223, 244, 327)などのサラワク出身の作家の作品も掲載されていたし、『蕉風』の美術面は黄乃群がいなければ成り立たないほどであり、ボルネオ(とりわけサラワク)は『蕉

なつたが、今日に至るまで(主にマラヤの人々によって)使われている。本稿ではできる限り「マラヤ」と「ボルネオ」と書くが、『蕉風』の記事に「西馬」「東馬」とある場合には、当時の言い方に従い、それぞれ「西マレーシア」「東マレーシア」と書く。

41) 1982年以来というのは、1982年12月号の美術版にサラワク美術協会の特集(357)が組まれたことを指しているものと考えられる。

風』に相当の貢献をしていたと言える。ただし、サラワク出身者であることを明示しない限りマラヤや他地域の作家に紛れ込んでしまい、サラワクの作家が活躍しているとは見えにくいという事情もあった。

ただし、この投書が投げかけた問題の本質は、サラワクやサバの暮らしを主題にした作品は『蕉風』に（そして馬華文学に）受け入れられるのかということだったように思われる。サラワクやサバではマレー人は少数派で、日常的に「馬」と「華」が対立関係で捉えられることはほとんどない⁴²⁾。日常的に感じられるのは、「馬」とも「華」とも異なる先住諸族（例えばサラワクでは「伊」⁴³⁾）との関係である。サラワクやサバの華人の間で先住諸族は「友族」と総称されており、民族関係を対立関係で捉えるマラヤとの違いが見て取れる。しかし、この感覚は、日常的に「馬」と「華」を対立関係で捉える傾向があるマラヤの華人には理解されにくい。

この投書の後、謝永就の詩（387-407）が数号にわたって掲載され、これに続いてサラワクに関する特集が3回組まれた。1回目のサラワク特集（411）には謝永就や方秉達など19人の作品が掲載された。

2回目のサラワク作家特集（460）では、沈庆旺による「加威安都」（ガワイ・アントゥ＝死者祭宴）をはじめとするサラワクの土地や風物を題材とした詩が多数掲載された。李笙は「独立」と題する詩で「八三一か九一六か」と問いかけた。1957年8月31日にマラヤ連邦が独立し、1963年9月16日にマレーシアが結成されたため、サラワクやサバから見ればマレーシアの独立（成立）記念日は9月16日であるはずだが、マレーシア結成後も独立記念日は8月31日とされた。サラワクとサバはマラヤと対等の立場でマレーシアを結成したと認識しているのに対し、マラヤはサラワクとサバを吸収したと認識していることを象徴的に示すもので、この詩ではマレーシアにおけるサラワクとサバの扱われ方に対する違和感が表明されている⁴⁴⁾。

42) ここでの議論は『蕉風』(旧版)が刊行されていた1950年代から1990年代までを念頭に置いている。1990年代以降にはマレー人を名乗る人が増えた(特にサバで顕著に見られる)。

43) イバン(伊班)人はサラワクの先住諸族のうち最大のもの。

44) なお、サラワクとサバの粘り強い交渉の末、2010年から毎年9月16日が「マレーシアの日」の祝日とされた。8月31日は「ムルデカ(独立)の日」の祝日で、マレーシアには独立・建国にかかわる祝日が2回ある。

この特集では、掲載された作品の多くでマラヤと大きく異なるサラワクの風土が強く表われており、サラワクという独特の土地の存在を顕在化させることに大きく寄与したと言える。ただしそれと引き換えに、マラヤの読者の目に、サラワクは独特の風土を持つためにマラヤとは異質な土地であり、自分たちの文学と直接の接点を持ちにくいという印象を与えた可能性も考えられる。

この後、サラワク五作家特集(477)で石覚天、林离、藍波、田思、順子の5人の作品が掲載され、また、サラワク出身の吳岸(475)と梁放(483)の特集も生まれ、『蕉風』におけるサラワク出身作家の認知度はいっそう高まったように見える。

もっとも、吳岸は1950年代に詩作を開始し、サラワクの主要河川であるラジャン川にちなんで「ラジャン河畔の詩人」と呼ばれた著名な詩人であり、「東馬一讀者」が前掲の投書(385)で筆頭に挙げたサラワクの作家であったことを考えるならば、吳岸の特集が組まれたのはかなり遅いと言えるだろう。

また、梁放は1953年にサラワクで生まれ、イギリスで土木工学を学んだ後にサラワク州水利灌漑局に勤め、エンジニアとして勤務する傍ら小説や詩の創作を行っている。梁放に対するインタビュー記事「生活的一切比什么艺术都丰富 纸上谈梁放」(483)では、何の留保もなく梁放を馬華文学者として馬華文学について尋ねている。サラワク出身の作家が馬華文学の中でプレゼンスを高めると馬華文学との一体化が進み、サラワク出身作家としての固有性が見えなくなるという仕組みをよく示している。

4. むすび

本稿では『蕉風』(旧版)の総目次をもとに『蕉風』がどの方向に関心を向けているのかを概観した。主に西洋文学と華語(中国語)文学の2つの大きな潮流を受け(ラテンアメリカ文学やソ連文学、そして日本の文学や映画にも関心を向け)、マレー語文学との関係を意識しながら、「馬」と「華」の意味を臨機応変に読み替えていくことで時代の要請に即した馬華文学を発展させようとしてきたことがわかった。マレー語文学との関わりでは、民族性は華人であるがマレー語で創作する作家が生まれている一方で、ボル

ネオの文学との関わりでは、サラワクの独自性を強調するとマラヤの作家から異質扱いされ、マラヤの作家の中に入ろうとするとサラワクの独自性が失われるという状況も明らかになった。

『蕉風』の第482号に「新人館」欄が新設され、毎号数人の作家に掲載の機会が与えられた。その第一期生の1人として『蕉風』でデビューしたのがサラワク出身の許通元である。当時マレーシア工科大学の学生だった許通元はその後も作家としての経歴を重ね、1999年に休刊した『蕉風』が2002年12月に復刊した際にはその中心的な役割を担い、『蕉風』の編集・刊行を担って今日に至っている。サラワク出身でマラヤを拠点に活動している許通元のような人たちが『蕉風』の編集・刊行を担っていくことで、『蕉風』と馬華文学がどのような展開を見せていくのかが注目される。

《蕉風》的世界：華文文學雜誌《蕉風》目錄中的語言、體裁和地區 (1955-1999年)

本文根據華文文學雜誌《蕉風》自創刊(1955年11月)至1999年2月暫時停刊期間的488篇文章標題清單(收錄在本書中)，對馬華文學的發展進行了研究。在其存在的44年中，《蕉風》在內容和形式上經歷了許多變化，這是由許多為其寫作，編輯和出版作出貢獻的人的熱情所推動的。專題文章的陣容表明，該雜誌在發展馬華文學時，對西方和中國文學有濃厚的興趣，對拉美，蘇聯和日本文學有關注，對藝術和電影有興趣，並認識到它與馬來文學的關係。馬華文學隨著時代的需要而發展，對「馬」(馬來語/馬來亞/馬來西亞)和「華」(華文/華人)的含義在不同時期有不同的理解。隨著婆羅洲(尤其是砂拉越)作家的影響越來越大，以及華人作家用馬來語寫作的出現，馬華文學如何進一步發展，將是一個有趣的問題。

**The World of *Chao Foon*:
Languages, Genres, and Regions in the List of Contents of
the Chinese Literary Magazine *Chao Foon* (1955–1999).**

This article examines the development of Mahua literature in the Chinese literary magazine *Chao Foon*. The study is based on a list of article headlines in 488 issues of the magazine from its first issue (November 1955) until its temporary closure in February 1999 (included in this book). In its 44 years of existence, the content and form of *Chao Foon* has transformed, driven by the enthusiasm of the contributors in the writing, editing and publication of the magazine. The analysis of the feature articles shows that the magazine has developed Mahua literature with a strong interest in Western and Chinese literature, an eye for Latin American, Soviet and Japanese literature, an interest in art and film, and an awareness of its relationship with Malay literature. Mahua literature has evolved in response to the needs of the times, with the meanings associated with 'ma' (Malay/Malaya/Malaysia) and 'hua' (Chinese) being read differently from time to time. With the growing influence of writers from Borneo (especially Sarawak) and the emergence of Chinese writers writing in Malay, it will be interesting to see how Mahua literature develops further.